

敬語教育・敬意表現教育に関する一考察 —その未開拓領域について—

嶋津 拓

キーワード： 敬語教育、敬意表現教育、敬語的挨拶表現、敬語的名詞語彙

1. はじめに

敬語教育あるいは敬意表現教育は、日本語を母語とする大学生に対する日本語表現法教育の分野においても、また日本語非母語話者に対する日本語教育の分野においても、その是非や位置づけに関して様々な意見がある。しかし、日本語に「敬語」あるいは「敬意表現」と呼ばれる一連の体系やシステムが存在し、その使用が日本語を用いたコミュニケーションで期待されている以上、敬語教育・敬意表現教育は、日本語表現法教育においても日本語教育においても、学習者が実社会で不利な扱いを受けないようにするという、リスク軽減の観点から、重要な位置を占めていると筆者は考える。

しかし、そのリスク軽減という観点から見た場合に、従来の敬語教育・敬意表現教育ではほとんど取り上げられることがなかったが、今後はその中に含めるべき領域の存在することに気づく。本稿では、かかる未開拓領域について、挨拶表現と名詞語彙に焦点をあてて考察する。

2. 敬語的挨拶表現

授業が終わったあとに、「おつかれさまでした」と教師に声をかけて帰る留学生がいる。また、最近では日本人学生も教師に「おつかれさまでした」と挨拶する場合がある。

しかし、学生から「おつかれさまでした」と挨拶されたら、なにか違和感を覚えなだろうか。

日本語非母語話者に対する日本語教育の分野で「おつかれさま（です・でした）」という表現、そしてそれとよく似た「ごくろうさま（です・でした）」という表現は、初級の中頃で導入されることが多いようである。たとえば、

日本国内外で最も普及している初級日本語教科書と言っても差し支えないであろう『みんなの日本語』（初級Ⅱ）では、「ごくろうさま」（ご苦労さま）が第30課に、そして「おつかれさまでした」（お疲れさまでした）が第39課に初めて登場する。

この「ごくろうさま」と「おつかれさまでした」という表現について『みんなの日本語』は、いずれも「Thank you for your hard work」と英訳している。² また、その使い分けについては、前者を「used by a superior or older person to express appreciation for a subordinate's work」と、後者を「used to express appreciation for a colleague's or subordinate's work」と解説している。

この「ごくろうさま（です・でした）」と「おつかれさま（です・でした）」という表現の使い分けに関し、筆者は2009年12月に日本語能力が上級レベルの留学生を対象に調査を行った。調査方法としては集団調査法を採用し、ひとつの教室に集まった調査対象者に調査の趣旨と方法を説明した後、その場で調査票を配布し、記入してもらった。調査に協力してくれたのは、東アジア地域出身の短期交換留学生13名（中国10名、韓国3名）で、回収率は100%だった。彼らは初級と中級の日本語を母国の高等教育機関で学び、日本には2か月前に到着したばかりである。

その調査の集計結果は別添のとおりである。これによれば、質問1～3に対する回答から明らかなように、調査に協力してくれた留学生の全員が、「ごくろうさまでした」という表現は、自分と同等の者に対して使用する場合を除けば、上位者から下位者に対してしか使えない（すなわち、下位者に対して使うことはできない）表現であるのに対して、³「おつかれさまでした」という表現は、下位者が上位者に対して使っても差し支えない表現と理解していた。また、この2つの表現の使い分けについて今までどのように習ったかと尋ねたところ（質問12）、調査対象者の全員が、「上・下」「目上・目下」「先輩・同輩・後輩」「上司・部下」という言葉を用いて説明しており、かかる2つの表現の使い分けに関し、母国の高等教育機関では基本的に「ウエ／シタ」の概念で教えられてきたことがわかる。この使い分けに基づけば、たしかに学生が教師に「おつかれさまでした」と声をかけても、おかしくはないだろう。

一方、この二つの挨拶表現の使い分けに関する日本語母語話者の意識に関しては、文化庁が2006年に調査を行っている。同年2月～3月に実施された

「国語に関する世論調査」(調査対象は全国の16歳以上の男女3,652人、有効回収率は57.7%)⁴の結果によれば、「会社で仕事を一緒にした人たちに対して、仕事が終わったときに何という言葉の掛けるかを、自分より職階が上の人の場合と自分より職階が下の人の場合について尋ねた」⁵ところ、「一緒に働いた人が、自分より職階が上の人の場合」は、「お疲れ様(でした)」が69.2%、「御苦労様(でした)」が15.1%であったのに対し、「一緒に働いた人が、自分より職階が下の人の場合」は、「お疲れ様(でした)」が53.4%、「御苦労様(でした)」が36.1%という結果だったという。⁶

この結果からは、日本語母語話者の場合もその多くが、「ごくろうさま(です・でした)」は上位者が下位者に対して使用する表現、「おつかれさま(です・でした)」は下位者が上位者に対して使っても差し支えない表現と理解していることがうかがえるのだが、この「国語に関する世論調査」の質問が、「会社で仕事を一緒にした人たちに対して、仕事が終わったときに何という言葉の掛けるか」というふうに場面を設定していることには留意する必要があるだろう。すなわち、敬語教育・敬意表現教育の場でしばしば用いられる「ウチ/ソト」という概念を用いれば、「ウチ」の人間にかける言葉を問うているのである。

それでは、「ごくろうさま(です・でした)」あるいは「おつかれさま(です・でした)」という表現は、「ソト」の人間に対しても使えるものだろうか。ここでは、日本人学生や日本での就職を希望する留学生が社会に出た時に、おそらくは最初に使うことになるであろう「おつかれさま(です・でした)」という表現に限定して考察するが、たとえばA社の課長が自社の製品をB社に売りこむために同社(B社)を訪ね、そこでプレゼンテーションをした後にB社の新入社員(若手社員)から「おつかれさまでした」という言葉をかけられた場合、筆者の語感からすると、この課長は当該社員に対して「生意気な奴だ」という印象を持つのではないかと想像する。それに対して、その課長が自社(A社)に戻ってきた時に、自分の部下である新入社員(若手社員)から「おつかれさまでした」と声をかけられた場合は、そういう感想を持たないのではないか。

すなわち、筆者の語感からすると、「ソト」の人間に対して、少なくとも下位者が「ソト」の上位者に対して、「おつかれさまでした」という表現を用いることは、あまり適切ではないのであるが、筆者が留学生を対象に行った調

査では、質問4～質問6に対する回答から明らかなおとおり、「ソト」の人間の場合には、たとえその人物が自分より下位者であっても、「ごくろうさまでした」という表現を用いることは適当でないとの意識が見られたものの、「おつかれさまでした」という表現を「ソト」の上位者に使うことについては、ほとんどの留学生に抵抗感がなかった。

教師と学生との関係は、基本的には「ソト」の関係にある（あるいは、少なくとも教師の側は「ソト」の関係にあると意識している）と言えるだろう。なぜなら、教育の場では成績をつける側とつけられる側という関係にあり、両者の間にはどうしても力関係が存在するので、「ウチ」の関係になることはむずかしいと考えられるからである。だからこそ、教師の側は授業が終わった後に、学生から「おつかれさまでした」という言葉をかけられると違和感を覚えるのではないか。それに対して研究の場（教師と学生が共同研究をする場面）では、両者が「ウチ」の関係に変化するので、この場面では、たとえば共同研究の成果を一緒に学会で発表した後に、その学生から「おつかれさまでした」と声をかけられても、違和感は覚えないのではないか。⁷

しかし、留学生の多くはそのような差異をあまり意識していないようである。質問7および質問8の回答から明らかのように、今回の調査対象者13人のうち11人は、教育と研究のいずれの場面でも、「おつかれさまでした」という表現を教師に対して使うことができると回答している。⁸

それでは、「ウチ」の関係にある場合は、いつでも「おつかれさま（です・でした）」という表現を使うことができるのだろうか。いろいろな場面を想定してみると、それが適切でないケースも思い浮かぶ。たとえば、A社の若手社員Bが仕事でミスをしてC社に迷惑をかけ、Bの上司であるD課長がC社に謝りに行って帰社した後に、そのミスをしたBから「おつかれさまでした」と声をかけられたら、D課長はどう思うだろうか。このようなケースでは「おつかれさまでした」ではなく、「ありがとうございました」あるいは「もうしわけございませんでした」と表現するほうが適切ではないだろうか。なぜなら、D課長の「つかれ」の原因はBが作ったものだからである。

このことは、たとえBがミスを行ってなくても言えることだろう。たとえばBが担当者として取り組んでいる業務の遂行において、D課長から何らかの支援を受けたとしたら、この場合も、「おつかれさまでした」ではなく、「ありがとうございました」と表現するほうが適切だろう。その理由もやは

り、D課長の「つかれ」の原因はBが作ったものであることに求めることができる。

これらの事例に対して、E課長が部下のFに資料作成を命じ、その資料が完成した時、E課長がFに「おつかれさま」と声をかけることには違和感がないだろう。Fの「つかれ」の原因はE課長が作ったものではあるが、この場合はE課長が上位者でFが下位者であることが、かかる表現の使用がおかしいと感じられないことの理由になろう。

このように考えると、「おつかれさま（です・でした）」という表現は、下位者が上位者の「つかれ」の原因を作った場合（あるいは上位者が「つかれ」を覚えるだけの「恩恵」を下位者が受けた場合）に使用するのには適切でないと言っていることができるだろう。しかし、この点に関する留学生の意識は二つに分かれていた。質問10のケース（若手社員がミスをしたケース）では、13人中6人の留学生が、「ごくろうさまでした」という表現はもとより「おつかれさまでした」という表現も使えず、「もうしわけございませんでした」あるいは「ありがとうございました」、またはそれらに類する表現が適当であると回答していたが、他の7人は「おつかれさまでした」という表現を使うことができるかと回答していた。すなわち、調査に協力してくれた留学生のうち約半数は、「つかれ」の原因というファクターについては、意識しなかったようなのである。

前述のように、教師と学生との関係は「ソト」の関係にあると言える。しかし、教師が学生から「おつかれさまでした」と声をかけられた時に違和感を覚えるのは、それだけが理由ではなく、授業終了後の教師の「つかれ」は学生に対する授業によって生じたものであることにも由来するのではないか。あるいは、少なくとも教師の側はそのように意識しているからではないだろうか。

以上の点をまとめると、「ごくろうさま（です・でした）」という表現と「おつかれさま（です・でした）」という表現に関して、「ウエ/シタ」の観点からのみ説明するのは適切でないということになる。とくに後者の「おつかれさま（です・でした）」という表現については、「ウチ/ソト」の観点からも、そしてさらには、その「つかれ」の原因は誰が作ったものかという観点からも、説明していく必要があるだろう。

その意味で、初級日本語教科書『みんなの日本語』が「おつかれさまでし

た」という表現について、「used to express appreciation for a colleague's or subordinate's work」と説明しているのは、不十分であると言わざるをえない。この説明は、たしかに「colleague」という表現を用いることで、「ウチ」の関係にある者に対して使用するというを示唆してはいるものの、そのことを明確には述べていないからである。また、相手の「つかれ」の原因は誰が作ったかという問題については、全く触れていないからでもある。

前述のように、筆者が留学生を対象に行った調査の結果からすると、彼らは「ごろうさま（です・でした）」と「おつかれさま（です・でした）」という表現について、「ウエ/シタ」の観点から使い分けなければならないということは認識しているようである。しかし、後者の表現については、かなり任意に使えるとの意識があるのではないか。その意味で、「おつかれさま（です・でした）」という表現は、「ごろうさま（です・でした）」という表現と対比的に教えるだけでなく、「ありがとうございます（ございました）」または「もうしわけございません（ございませんでした）」という類の表現とも対比して教えるべきかもしれない。

今のままでは、学生がたとえば就職のための面接試験が終わって退出する時に、面接委員に対し「おつかれさまでした」と朗らかに挨拶をして、それまでの好印象を台無しにしかねない。

3. 敬語的名詞語彙

敬語教育・敬意表現教育において、名詞に関する教育はあまり重視されていない。授業でとりあげられるのは、せいぜいのところ、接辞「お」と「ご」の使い分け、あるいは「貴社」と「弊社」のような尊敬表現と謙譲表現の言い換えぐらいだろう。

しかし、名詞語彙にははじめから尊敬あるいは謙譲のイメージを帯びているものがある。ところが、これに関する教育はほとんど等閑視されているのが現実ではないだろうか。たとえば、「報告」という名詞はその一例である。

岩波書店の国語辞典は、「報告」という語彙について、「告げ知らせる、特に、任務・調査などを行った状況や結果について述べる。また、その内容」と説明しているが、それにつづけて、「第二次大戦中までは、下級者から上級者に差し出す場合に限って言った」としている。しかし、この後段の説明は「第二次大戦中まで」に限られることだろうか。少なくともイメージの

上では、今日でも「下級者から上級者に差し出す場合に限って」使うという意識が残っているのではないだろうか。⁹

たとえば、ある企業のある課の課長補佐がその課を代表して全社的な会議に出席し、会議終了後、電子メールで全課員に「会議結果をご報告申し上げます」と「告知知らせる」場合を想定してみよう。電子メールは、「様々な関係にある複数の相手などに同時に情報を伝達できる効率性を持つものであるが、この反面で、様々な関係の相手に向けて同じ言語表現による伝達を一律に行ってしまうことによって、それぞれの相手への配慮をきめ細かくは表現できない場合がある」¹⁰ 情報通信手段であることから、かりに受信者の多くが自分より下位者であっても、発信者は受信者の中に自分より上位の者がひとりでも含まれていれば、その上位者を意識した言語表現を用いることになるだろう。したがって、上記の例で発信者である課長補佐が「報告」という謙讓的な語彙を使用しているのは、受信者の中の課長（だけ）を意識してのものと言うことができるのだが、それでは、この電子メールを受けとった側は何と返信すべきだろうか。まず、上位者の課長は「報告ありがとうございます」と返信することが可能だろう。しかし、当該課長補佐より下位にいる者の場合は、「ご報告ありがとうございます」と返信することができようか。かかる返信を受けとって何とも思わない人もいるだろうが、なかには感情を害する者もいるだろう。それは「報告」という単語に、「下級者から上級者に差し出す場合に限って」使うというイメージが残っているからではないかと考えることができる。

それでは、何と返信したらよいのだろうか。リスクの軽減という点で言えば、「ご連絡ありがとうございます」と返信するのが無難だろう。なぜなら、「連絡」という名詞には「下級者から上級者に差し出す場合に限って」使うというイメージがないからである。たとえば、前述の岩波国語辞典は「連絡」という名詞について、「別別のもの間のつながりあい」「つながりがつくこと」「つながりをつけること」と説明しており、そこに「ウエ/シタ」に関する記述は見られない。

しかし、筆者が留学生を対象に行った調査では、質問14の回答から明らかなおとおり、13人中12人の学生が「ご報告ありがとうございます」という表現を是認していた。その12人に調査票を回収した後で尋ねたところによれば、「報告」を「連絡」という単語に置き換えなければならない（あるいは、置

き換えたほうがいい) という考えが少しでも頭をかすめた学生は皆無だった。それよりも、彼らが気にしていたのは、接辞を付けるかどうかという点だったようである。

しかし、上記の例で言えば、「ご報告ありがとうございました」と言うよりも、尊敬の接辞をつけずに「連絡ありがとうございました」と表現するほうがまだましなのではないだろうか。謙譲語としての「ご報告」という表現は存在しえても、上位者の行為に関して下位者が尊敬語としての「ご報告」という表現を使用するのは適切とは言えないのではないだろうか。¹¹

敬語教育・敬意表現教育の場においては、日本語母語話者に対する日本語表現法教育の場合も、日本語非母語話者に対する日本語教育の場合も、名詞に関しては、当該名詞に「ご」または「お」という接辞を付けるか否か、あるいは「ご」または「お」のいずれの接辞を付けるかということには学習者の注意を喚起するものの、そもそも上位者に対して使用するのが適切でない名詞語彙が存在するという点については、ほとんど取りあげていないのが現状ではないだろうか。しかし、学習者のリスク軽減という観点からは、今後はかかる名詞語彙への注意を喚起することも必要になるのではないかと考える。

4. おわりに

本稿では、「おつかれさま (です・でした)」という挨拶表現と「報告」という名詞語彙を例にあげて、従来の敬語教育あるいは敬意表現教育ではほとんど取りあげられることがなかったが、今後はその中に含めるべき領域が存在することを指摘した。それでは、どうして含めなければならないのかと言えば、学習者のリスクを少しでも軽減するためである。

おそらく「おつかれさま (です・でした)」という表現と「報告」という語彙は、学生が社会人になってすぐに使う、しかも使用頻度のきわめて高い表現・語彙であろう。したがって、彼らのリスク軽減という観点からは、少なくともこれらの表現・語彙だけでも、大学の日本語表現法教育あるいは日本語教育で扱っておく必要があるものと考えられる。

【註】

- 1 国語審議会が2000年に発表した答申『現代社会における敬意表現』は、

「敬意表現」という概念について、「相手や場面に配慮した言葉遣いは敬語以外でも行われていることに注目し、敬語に加え、敬語を使わずに配慮を表す表現も含め、「敬意表現」として扱う」としている。本稿でとりあげる敬語的挨拶表現と敬語的語彙も、狭義の敬語には含まれないかもしれないが、広義の敬語あるいは「敬意表現」には含まれることになるだろう。

- 2 ただし、第44課の「会話」では「Thank you for being patient」と訳すのが適当な「おつかれさまでした」も登場している。
- 3 ただし、質問3に対する回答結果からすると、半数以上の学生は、「ごころうさまでした」という表現を、上位者が下位者に対して使うべき（あるいは、使わなければならない）表現と理解しているようである。
- 4 調査方法は、個別面接方式（調査員による面接聴取法）を採用していた。
- 5 文化庁ウェブサイト
- 6 この調査結果を受けて、国語審議会は2000年に発表した答申『現代社会における敬意表現』において、「例えば「御苦労様」という表現はねぎらいの意味を持つので、会社の上司や年長者に向かって言うのは不適切だと感じる人もいる」としている。
- 7 これらの点に関する留学生の意識については、別添資料（質問7～8に対する回答結果）を参照。
- 8 他の2人は、授業が終わった後の教師に対しては、「ありがとうございます」と挨拶すべきだと回答している。
- 9 終戦から7年が経過した1952年に国語審議会が発表した答申『これからの敬語』では、謙譲表現としての「ご報告」は例文（「ご報告いたします」）の中に見られるものの、尊敬表現としての「ご報告」は出てこない。
- 10 国語審議会（2000）「新しい情報通信手段における言葉遣いと経緯表現」
- 11 むろん、話者が談話に登場する（自分よりも）上位の者の行為について、「ご報告」という尊敬表現を使用すること（たとえば、「部長が社長にご報告をされる」と若手社員が言うこと）は可能である。ちなみに菊地康人（1997）は、「報告」という単語について、「ご報告なさる」という表現と「ご報告する」「ご報告いたす」「ご報告申し上げる」という表現の両方が可能な語だとしている（469頁参照）。

【参考文献】

- ① 菊地康人（1997）『敬語』（講談社学術文庫）
- ② 国語審議会（1952）『これからの敬語』
- ③ 国語審議会（2000）『現代社会における敬意表現』
- ④ スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語：初級Ⅱ本冊』
- ⑤ スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語：初級Ⅱ翻訳・文法解説英語版』
- ⑥ 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（2000）『岩波国語辞典第六版』
- ⑦ 文化庁ウェブサイト「平成17年度「国語に関する世論調査」の結果について」（<http://www.bunka.go.jp/>）2009年12月5日検索

（留学生センター教授）

【敬語的な挨拶表現・語彙に関する調査集計結果】

1. 次の場合、「ごくろうさまでした」と「おつかれさまでした」という表現を使うことができますか。それとも使うことができませんか。当該するもの一つに○をつけてください。

【質問1】あなたはA社の新入社員です。午後5時に同じ新入社員のB君が、「お先に」と言って家に帰る時、そのB君に対して－	
(a) 両方とも使うことができる。	4人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	2人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	7人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問2】あなたはA社の新入社員です。午後5時に上司のB課長が、「お先に」と言って家に帰る時、そのB課長に対して－	
(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	13人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問3】あなたはA社の課長です。午後5時に部下のB君が、「お先に失礼します」と言って家に帰る時、そのB君に対して－	
(a) 両方とも使うことができる。	5人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	8人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	0人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問4】あなたはA社の新入社員です。B社の新入社員が同社（B社）の新製品を売り込むためにA社を訪れ、プレゼンテーションをしました。そのプレゼンテーションが終わった後、B社の新入社員に対して－	
(a) 両方とも使うことができる。	4人

(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	9人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問5】あなたはA社の新入社員です。B社の課長が同社（B社）の新製品を売り込むためにA社を訪れ、プレゼンテーションをしました。そのプレゼンテーションが終わった後、B社の課長に対して―	
(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	12人
(d) 両方とも使うことができない	1人

【質問6】あなたはA社の課長です。B社の新入社員が同社（B社）の新製品を売り込むためにA社を訪れ、プレゼンテーションをしました。そのプレゼンテーションが終わった後、B社の新入社員に対して―	
(a) 両方とも使うことができる。	4人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	2人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	7人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問7】あなたはA大学の学生で、B教授の授業を受けています。授業が終わった時にB教授に対して―	
(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	11人
(d) 両方とも使うことができない	2人

【質問8】あなたはA大学の学生で、B教授と共同研究をしています。学会でB教授と一緒に研究発表をした後、そのB教授に対して―	
(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人

(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	13人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問9】あなたはA社の新入社員です。上司のB課長が商談のためにC社を訪問し、A社に戻ってきた時、そのB課長に対して－

(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	13人
(d) 両方とも使うことができない	0人

【質問10】あなたはA社の新入社員です。仕事でミスをして、B社に迷惑をかけてしまいました。このため、あなたの上司のC課長がB社に謝りに行きました。そのC課長がA社に戻ってきた時、C課長に対して－

(a) 両方とも使うことができる。	0人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	0人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	7人
(d) 両方とも使うことができない	6人

【質問11】あなたはA社の課長です。部下のB君に資料作成を命じ、その資料が完成した時、B君に対して－

(a) 両方とも使うことができる。	5人
(b) 「ごくろうさまでした」のみ使うことができる	8人
(c) 「おつかれさまでした」のみ使うことができる	0人
(d) 両方とも使うことができない	0人

2. 長崎大学に来る前、あなたは、「ごくろうさま（です・でした）」と「おつかれさま（です・でした）」の使い分けについて、どのように習いましたか？（【質問12】）

目上の人には「おつかれさま」、目下の人には「ごくろうさま」と言う／「ごくろうさま」は部下に、「おつかれさま」は上司に使う／「ごくろうさま」

は同輩あるいは目下の人に使う表現、「おつかれさま」は同輩または目上の人に使う表現／何か仕事が終わった時に、目上の方は目下の人に「ごくろうさま」と言い、何か一緒に仕事を成し遂げた時に、目上の方と目下の方はお互いに「おつかれさま」と言う／「ごくろうさま」は上司が部下に使うのに対して、「おつかれさま」は同級の人や自分より地位の上の人に使う表現だと習った／「ごくろうさま」は後輩に、「おつかれさま」は先輩に使う／「ごくろうさま」の意味は「おつかれさま」と同じだが、目上の人に使うてはいけない／「ごくろうさま」は上から下へ使う言葉だが、「おつかれさま」はいつでも使える（筆者註：この記述式回答部分の表現は、文意を損なわない範囲で一部修正した。）

3. 次の場合、電子メールでの返信内容は適切ですか。それとも、適切ではありませんか。当該するもの一つに○をつけてください。また、その理由を書いてください。

〔事例〕ある会社の営業課に勤務するA課長補佐が、全社的な会議に出席した後、その会議の結果を営業課の課員全員に連絡するため、「会議結果をご報告申し上げます」という文で始まる文章を書いて、電子メールで全課員に送信しました。

【質問13】あなたは営業課の課長（A課長補佐の上司）です。A課長補佐のメールに「報告ありがとう」と返信しました。

- | | |
|------------|-----|
| (a) 適切である | 13人 |
| (b) 適切ではない | 0人 |

【質問14】あなたは営業課の新入社員（A課長補佐の部下）です。A課長補佐のメールに「ご報告ありがとうございました」と返信しました。

- | | |
|------------|-----|
| (a) 適切である | 12人 |
| (b) 適切ではない | 1人 |

【備考】

質問1～11においては、「両方とも使うことができない」という選択肢を選んだ回答者に対し、「それでは、どういう表現が最も適切ですか」と尋ねた。その結果、質問5と質問8の場合は「ありがとうございました」という表現、質問10の場合は「もうしわけございませんでした」と「ありがとうございました」という表現があげられた（ただし、いずれの場合も類似表現を含む）。その他の質問項目については、「両方とも使うことができない」という選択肢を選んだ回答者はいなかった。

また、質問13に対しては全員が「適切である」と回答し、その理由として「返信者が上司だから」（類似表現を含む）としていた。一方、質問14に対しては13人中12人が「適切である」と回答し、その理由として「名詞「報告」に「ご」を付けているから」（類似表現を含む）としていたが、1人だけ「報告という言葉は下から上へ使う」という理由から「適切ではない」と回答した留学生がいた。

敬語教育・敬意表現教育に関する一考察 ―その未開拓領域について―